
神様のおもちゃ箱

仁科治

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様のおもちや箱

【Nコード】

N1090L

【作者名】

仁科治

【あらすじ】

受話器から聞き覚えのない声がした。

「Fちゃん、Fちゃんよね」。私の名前を小さな声が呼んでいた。

3 「小さいころは優しい子だった」

3 「小さいころは優しい子だった」

電話だった。長女が寝る前に、音、大きくしたよと言っていた。寢室をでると、台所のカウンターの隅でオレンジ色の光がけたたましく点滅していた。

受話器から聞き覚えのない声がした。

「Fちゃん、Fちゃんよね」。私の名前を小さな声が呼んでいた。

「わたし、ほら、敏子」

義母の郷里からだった。

敏子は義母の従姉妹で、私と同年だった。会ったのは四〇年近く前になる。小さな声は懐かしそうに話しかけてきた。

「一度、こつちに来てみない。Fちゃんのお父さん、歩くのが辛そうだね、血圧も高くって。いま私、おばさんには内緒でかけているの」

父とは三〇年以上、義絶に近い関係が続いていた。妻が盆暮れのやりとりをしているようだが、私は一切関わってこなかった。

父をどうしても受け入れられなかった。

一五年ぐらい前に、祖母の葬儀で顔を合わせた。

父は話しかけてきたが、私は答えずにその場を離れた。このとき、私の生母もいたが、私は相手にはつきりとわかるように顔を背けた。葬儀の間、親戚が私と父の間を取り持とうとしたが、私は頑なに拒んだ。

一〇年ほど前、義母から電話があった。私は留守だった。

「お父さんが入院しても、義母さんの言うことを聞かないそうよ」。妻は義母の言伝を話した。

背筋が寒くなった。私は無視した。それっきり電話は来なかった。その一週間後ぐらいに、叔母から妻に電話があって、皮肉を言わ

れたらしい。

「Fちゃんは、小さいころは優しい子だったって」。妻の言葉に憤りがあつた。父と義母は郷里に帰ると叔母に伝えてきたそうで、そのとき、私には話してくれるなど念を押したと言う。そのときから、父と義母の存在を排除することに拘りはなくなつた。

そう、数日前の義母の言伝と、叔母の電話までは繋がりは消えていた。

「いま、私のところで一緒に暮らしてるんだけど。おばさんはもう電話するなって、怒るの。でも、叔父さん、歩くのも大儀そうで」
義母は、私を恨んでいるだろう。

明朝は早いのでと言って、敏子の言う電話番号を書き取つた。敏子をはじめ連絡先を伝え渋つた。義母が知ることを恐れているような口振りで、「いま、一緒だから」と何度も言つた。義母の私への憎しみが伝わってきた。

私は、義母の私への憎しみを思い出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1090/>

神様のおもちゃ箱

2010年10月20日19時05分発行